

第六章 革命中国において

(1) 方法は運動

日本においては一九四五年は、歴史的にも大きな転換点を迎えるわけであるが、中国ではそれほど重要な意味あいを持っているわけではない。むしろ一九四九年、中華人民共和国の成立が旧時代との区分点ということになるが、見方によってはそれすらもあいまいなものになってくる。なぜならば中国革命の歴史を追うものにとつて、新時代における方法と目標は、かつてのものと基本的にはほとんど変わらないのであり、中華人民共和国とはそれまでの根拠地の、全国的規模までの拡大に他ならないからである。それだけ毛沢東共産主義は、頑固な一貫性を持っているのだ。

方法の基本は運動であることは、いうを待たない。毛は学生時代の著作である『体育の研究』（一九一七）でいっている。「人間は動物である。したがって、人間にとって動は非常に重要なことである。……私は天と地との間にただ動あるのみと考えている」というわけで、彼はその頃学内に流行していた静坐にも強い疑問を呈している。そして、この天地にあるものは動のみといった信念において毛は、革命後も運動に次ぐ運動をもつて、絶えず問題の解決に当たってきたのである。運動は時に批判となり、弾圧となり、闘争となった。連統革命を産みだす根拠ともなった。

その代表的な運動を拾うだけでも、

一九五一年 反革命弾圧、土地改革運動

一九五一年 三反五反運動

一九五二年 知識人の思想改造運動

一九五六年 「百家争鳴」つづいて反右派闘争

一九五八年 「大躍進」と人民公社運動

一九六三年 社会主義教育運動、四清運動

一九六五年 プロ文革

——とある。この間にも数知れない運動（大運動の中の小運動）があり、運動と運動の休閑期にも絶えず問題の指摘と、次の運動のための準備運動が活発になされている。社会の流動性が流動性として生かされることが必要なので、一刻も停滞することは許されないのである。毛の講話（一九六六・七）によると、「私が、北京に戻ってきてからは、大変淋しかった。（学校は）火が消えたようになっていた。ある学校は表門を全部閉じてしまっていた。一部の極端な学校では学生運動を弾圧していた。」かくて爾後三年にわたる大運動としての、プロレタリア文化大革命が始まるのである。

問題は運動によって解決する。絶えず流れている川は淀まない。それが毛思想の核心である。これは余談であるが、私どもがみた「上海工業展」において、大型機械よりはむしろ携帯用各種機器がひどく目についた。トラックで運べる輪転機、自転車ペダルを使つての発電機、野外用手術機械等々。これらはいずれも現中国の臨戦体制を表わすものに他ならないが、思想的には動を意味する。機器に至るまで動が前提になっている。

しかも運動を荷なうものが人間であり、究極は大衆の思想改造であるところから、甚だしくアナキスティックなものになってくる。なぜなら、アナキズムは根本において権力否定であり、主体中心の考え方をとる。命令等の強制によらない以上、教育による教化が非常に大きな

方法論的意味あいを持つてくる。またアナキズムは個人主義的ではあるにしろ、本質的に大衆主義の一面を持っている。それは大衆の肉体から泌みだす液汁のようなものである。つまり人間の自然性、ひいては善性を原則としているから、直接行動の自生性と無理のない集団性、連帯性が何よりも尊ばれることになる。ひっくり返して言えば人間・教育・直接行動・集団性を、集約的にまとめたところを、毛は運動としたのである。

アナキズムにおいては、すべて人間の自然性を前提としない考え方は排される。大は政治、法律から、小は綱領・規約に至るまで、アナキズムのものではないことになる。それらは民衆を抑圧する、権力者の支配のための武器に他ならないのである。派生的にはむしろ政党や団結が否定されることはいうまでもない。そうしたアナキズムにおける特有性を、中共は絶えず限定的にはあるが、受け継いでいるのである。

その典型的な在り様は法律である。中国は日本のような成文法主義の国ではないので、法律万能という思想はない。したがって資本主義国にあるような民法典もなければ商法典もない。一九五九年八月、訪中法律家代表団の報告によれば、例えば刑事法の分野では反革命犯処罰条例（一九五二）、汚職処罰条例（一九五二）等はあるが、殺人・暴行等の一般犯罪について体系的な刑法典を持っていないのである。極端に言えば中国は無法社会ということになる。たとえ法

律がなくとも、政治と社会体制の変化において、犯罪は発生しなくなっているのである。また発生しても、一般犯罪においては教育刑をとるので、刑務所の中身は東独・東欧と比べると、よほど異なっている。(北京のみだそうであるが、刑務所にはカギがなく、収容者は毎日、グループ学習を行なっている。)

それは現象的にみる限り、バクーニンの犯罪観と酷似しているのである。

一時よく「中共は綱領のない党である」といわれたが、実に精密ともいえる運動方針がある半面、規約・綱領の面でハッキリしないのも、同じ理由による。問題は人間であり、全的な合意である。根源的に原則の満場一致と行動の個別主義があれば、決議だの、決定だのといった面倒な手続きを必要としない。むしろ中共はそこまではいいないが、近代的な社会契約の観念に欠けていることは事実であろう。それが伝統中国と農民の姿なのだ。毛は教師時代(一九一九、フランス首相クレマンソーを揶揄して、「無知なクレマンソー老人は浅黄色の部厚い書類(ベルサイユ講和条約)を抱え込み、それに署名しさえすればアルプスの如く安泰だと思いついて」)といっているが、そこにも契約についての同じ発想が流れている。

運動の暴動的、一揆的性格もずっと保持したままである。湖南農民運動で体験した民衆の嵐のような直接行動にみる、一挙実現の性格は、革命後においてもしばしばくり返される同じパ

ターンである。匪賊は今はないが、群盗毛の如く起る、といった過熱的な行動性のみは残されて、いったん火がつくやたちまち燃え広がるのである。その民衆の炎のような火勢に乗って、中共は土地革命・大躍進・人民公社と、運動を短時間の間に最大限に燃焼させてきたのである。人民公社化運動などは、指示が出た約六カ月後(一九五八・九末、全国農民の九〇・四％が二万三千個の公社をつくったといわれる。そのあまりの急進性に、党中央部の方がおろおろしていたくらいである。プロ文革においてもほとんど同じ型がみられる。

ただし運動といっても、毛のそれは絶えず制限的であることが特徴である。毛は運動の極点としての戦争においても、つねに冷静な戦略家であった如く、運動の激化した状況においても知的な現実性を失わない。『湖南農民運動の視察報告』において「ゆき過ぎ」を認めた同じ人間が、「党内の誤った考え方は是正について」で、冒險主義を否定したように、彼は絶えず二面的である。一度燃え上がった民衆の活力は最大限に利用するが、しかもその直後には、「ゆき過ぎ」にブレーキをかけ、自らの誤ちに気づかせるようにする。アナキズムの心臓に、マルクシズムの頭脳が重なっているといってもいい。

その意味では毛を、一部の言のように極左派とするのは当たらないのである。プロ文革中毛は自ら、「私は中道左派である」ということをいったが、考えてみれば全く正直な告白である

と考える。日本ではしばしば文革について、毛はさんざん青少年をあおっておいて、初期の目的が達せられるや、これを中断した（裏切った）といわれるが、むしろそれが毛の本性的なり方なのである。その点では毛はアナキストというより、徹頭徹尾マルキストである。そのことを承知しておく必要がある。

(2) 目標は平等

新生中国の方法において、それ以前と大差ない如く、目標においても、依然として中国は革命当初の世界を追いかけているといえる。なぜなら先にもいうように、新生中国はそれ以前に、すでに新生中国（ソヴィエト）を持っていたのであり、その中国での体験はみな一九四九年以降に活かされているからである。その点ロシア革命とよほど異なる。

それでは新生中国を動かしている原動力としての目標は何かといえば、それは大同理想である。むしろ大同理想にもいろいろあって、私が通訳団の責任者に問うた際にも、何がしかの批判を加えていた。しかし大筋のところでは肯定的な雰囲気は否めなかった。大同理想の根本思想は平等である。平等であれば友愛と平和の社会が訪れる。それ故に不平等の是正が、中国革命

の思想的核をなしている。中国革命とはとりもなおさず、不平等という格差の、膨大な均衡（復原）エネルギーに他ならないのである。

しかもその場合格差の経済的基礎は、土地問題であった。中国では革命直前まで全農地の六〇％が地主に握られ、全農民の七〇％が貧民層をなしていた。したがって土地問題は、中国革命にとっての最重要問題である。土地革命さえ成功すれば、どこ地域においても即座に根拠地化する可能性を持っていたのである。その点単純といえば単純な論理を持っていたのが中国革命であるといえる。古くは孟子の「井田法」から、近くは孫文の「耕者有其田」（耕作農民に土地を）に至るまで、中国に一貫して土地の均分思想が流れている理由である。ただし初期には国民党との関係があり（国民党将校には地主子弟が多い）、富強に対しては慎重であらねばならなかったのだ、土地問題をめぐっては多くの論議がなされていた。

そうした不平等を、かれらは「差別」といい、「対立」といい、「矛盾」といい変えるのであるが、基本的には土地の差別が排除された今は、中国は古典的な三大差別の解消に向かって進んでいるといえる。三大差別とは、『共産党宣言』にいう、「都市と農村との対立」を基本とする、「労働者と農民」「肉体労働と精神労働」の三大対立をいうのである。中国ではさらにこれを細分化して、「十大矛盾」（注）といういい方をしている。「十大矛盾」の解消が革命目標

である。その目標の達成方法において論議が別れる。原則に直接的で、あくまで頑固忠実であろうとするのが、毛沢東であり、段階的、穏歩派は日和見主義、修正主義ということになる。その典型的な原則主義の例は中国軍にみえている。

アナキズムにおける軍の考え方は、根本的には否定である。必要とする場合も命令と服従の正規軍方式をとらないで、自衛的な民兵制度をとる。下からの自生的な組織である民兵制度には、むしろ制服もなければ、階級もない。指導員は兵士の中から民主的な手続きによって選ばれる。戦闘の最中にも、全体の動きの中で評価され、判断された各自の適応性にしたがって、それぞれの役割が分担される。ある男は指揮し、ある男は遂行する。その場合にもあくまで指揮も遂行も、階級的差別として行なうものではない。

こうしたアナキズムにおける軍の原則を、中国ほど可能的に迫っている軍隊は、他のどこにもないのである。かつて林彪はいった。「民兵工作はわが国防建設の根本問題であり、戦略問題の重要な構成部分であり、党の大衆路線の戦争面における具体的運用である」と。かくて現在中国には二億人の民兵がいるとされている。各機関、工場、人民公社の人民武装部単位に組織され、正規軍に準ずる訓練と装備がほどこされている。訓練と学習は早朝または夕方行なわれ、生産活動や国境警備、海岸防衛に重要な役割を果たしている。このうち思想堅固で身体の大

きなものは、「基幹民兵」に編入され、その数は七千五百万人とされている。

この民兵の射撃訓練を、武漢でみる事ができたが、実弾射撃と地雷爆発の猛烈さと正確さに目をみはる思いをしたことである。団の中に元軍隊時代の優秀な狙撃手がいて、彼にいわしめても民兵の射撃点数は相当高いということであった。しかも民兵隊の中には婦女はおろか、小学一、二年生の子供もまじっていて、身の丈より大きい銃を手にして、正確に風船を落したりする。基幹民兵は、迫撃砲、対戦車砲、ロケット砲まで持ち、地道戦訓練やパラシュート降下訓練などもうけており、戦闘力はなかなか高い。民兵にしてみれば、地域生活と職場を守る意識が濃いため、戦意も盛んなのである。

毛軍事路線のこうした在り方は、当然正当マルクス主義並びにソ連式軍事方針の支持者からは批判を受けることになる。事実、解放後、彭德懷・羅瑞卿・劉少奇らの正規軍重視主義者によって、民兵の役割は過少評価された。それが一九六〇年の中央軍事委員会拡大会議のあと、再び意義が再確認されたのである。

ただし民兵は重視されても、正規軍の必要もまた認めるとというのがマルクス主義者としての毛であり、現実主義者としての毛である。現在中国軍は推定（英戦略研究所）で陸軍二百二十万、海軍十三万六千、空軍十万、公安部隊と国境警備隊三十万とされている。世界一の軍事

国家といっているものである。だがこの正規軍といえども、他とよほど異なるので、階級制というものがない。一時ソ連方式に習って位階制度を採用したが、一九六五年には再び国務院の提案に基づいて軍の階級制度が廃止されることになった。階級制度を敷いてみると、将校と兵士の間、軍隊と民衆の間の親密な関係が失われてきたことがわかった。軍及び高級将校は、次第に特権化してきたのである。

ただし位階制を廃したといえども、指揮員をなくしたということではない。将校と兵士の区別のみはあり、職務としての指揮官はいるのである。兵種は服色でわかるが、将校と一般兵士の区別は、上衣に下ボケットのあるなしで区別できる（兵士はない）。このようにすることによって、解放軍内部には再び将校と兵士との間に親密さが甦ったといわれる。

平等→無階級社会の実現という点では、軍隊もさることながら、もっと基本的な面で重要なことがらがある。それは給与の平均化である。レーニンはその最もアナキズムに近よった著作である『国家と革命』において、エンゲルスを引いてバリ・コミュニケーションの条件は、次のようであるといっている。

「第一に行政、司法、教育などの一切の地位につくものを、関係者の一般投票による選挙で決め、しかもまたその関係者によっていつでも解任できるようにした。第二に、地位の高低を

問わず、どんな職務にも、他の労働者並の賃銀しか払わなかった。」（一九六六年、鄭之思論文において同じ意味のことが述べられている。）

バリ・コミュニケーションに学んだ、国家が再び抑圧の機関に転化しないための二条件であった。それはとりもなおさず、無政府のための条件に他ならなかったのである。この基準に照してみれば、未だ中国はコミュニケーションにほど遠い。しかし少なくともソ連に比べて賃銀格差の少ない点では、はるかに勝っている。ソ連では賃銀格差は八十倍から百倍とされ、中国では十倍から十三倍ぐらゐとされてきた。それがプロ文革の中では、さらにせいぜい八倍ぐらゐまで縮まっている。（一般労働者、中国三倍、ソ連八倍。）今日ではよほどの熟練者や技師、幹部でも、百一、三十元（^{ユアン}）どまりとされている。（一般産業労働者七十元ぐらゐ。）文革の最中、毛自ら主席の給料を引下げたり、大学教授が給料引下げの申し出をしたりして話題をまいたが、そうした給料引下げの背景には、中国のコミュニケーション志向の意図が含まれていたのである。

三大差別の解消については、先年の文革の終息的表現としての、毛の「五・七」指示が何よりも明確に物語っている。「五・七」指示というのは、一九六六年五月七日付、毛の林彪宛の手紙の一部を指すもので、この中で毛は要旨次のように呼びかけているのである。

人民解放軍は政治を学び、軍事を学び、文化を学ぶ。さらに農・副業生産に従事し、若干の

中小工業を設立して、自己の必要とする諸生産品、および国家と等価交換する生産品を生産することが可能である。

労働者は工を主とし、兼ねて軍事、政治、文化を学ぶ。

公社農民は農を主とし、兼ねて軍事、政治、文化を学ぶ。

学生もこのようにし、学を主とし、兼ねて別のものを学ぶ。

——毛は不平等を、客観的な経済法則による是正以前に、人間をまずとらえ、人間のつくり変えをもって克服しようとしている。専門人は専門人であることによって地位が固定し、特権化し、支配者を産みだすことになる。それを防ぐためには、各専門人に専門以外のもの（殊に政治と軍事）を学ぶよう呼びかけているのである。幹部・知識人には労働が要求される。そうすることで差別を是正し得ることができると考えている。これはマルクスの提案というより、むしろクロボトキンの説に酷似している。それを受けてかの劉師培は「人類均力説」なる論文を書いて、一人の人間が多く技術を身につけることの利を主張していたのである。

クロボトキンによると、資本主義生産は利潤の追求をした結果、人間にとって一番必要な農業生産を進歩させず、重工業方面のみめざましい進歩を遂げさせた。その結果、「都市と農村」「工業と農業」の対立がますますひどくなり、能率本位の分業制度のために「頭脳労働と

肉体労働」の分裂も激しくなったのである。したがってこの体制が改められ、人間の欲望の必要に基づいての再編成を行なうことを主張した。その再編成の原則として、農業と工業の一体化、頭脳労働と肉体労働の総合、産業の分散（自給自足的手工業の発達）等を挙げたのである。これまでにしばしば中国革命方式をバクーニンの言に比してきたが、建設理論としては、よりクロボトキンに似かよっているのが、毛沢東思想であるといえる。

（注）十大関係（矛盾）

- (1) 工業と農業、重工業と軽工業の関係
- (2) 沿海工業と内陸工業の関係
- (3) 経済建設と国防建設の関係
- (4) 国家・生産単位と生産者個人の関係
- (5) 中央と地方の関係
- (6) 漢民族と少数民族の関係
- (7) 党と党以外との関係
- (8) 革命と反革命の関係
- (9) 是と非との関係
- (10) 中国と外国との関係

現代中国にあつて、アナキズムとの関係が、プロ文革においてほどその姿を露わにみせた機会はないであろう。そこにおいては確かにアナキズムは徹底的に否定された。しかしその徹底性においてむしろより深刻に、この国の社会と党のアナキズムへの志向性を感じざるを得ないのである。アナキズム——それは文革にあつては、複雑にからみあつて表現されるので、文革の指導者の側において、指導される側においての双方にみられる。しかも指導される側においても、当局が意味するような「混乱」と「無秩序」において、アナキズム本来の正当性においての双方に現象していたといえるのである。

文革を指導する側のアナキズムについては、自らがいうよりその批判者において、確かめることができる。日本共産党の袴田里見は、プロ文革の実態として、「この『文化大革命』は、これまでの中国共産党や国家の指導者たちを片っぱしから追放する暴力騒動にすぎない。……この党が正常な機能を失つてしまつて何がプロレタリア独裁でしょう。何が人民民主でしょう」(一九六七「八・一五記念講演」)といっている。これを受けて黨員の中には、「あれはまったくア

ナキズムではないか」という批判の声が現われてくるのである。

確かにこの文革において中国共産党は完全にとつていいほど、破壊されてしまった。それだけ文革直前における中共党は、劉少奇路線に充たされていたのである。劉少奇路線なるものが資本主義的であつたとすれば、中国共産党は甚だしく資本主義的に傾いていたといわねばならない。毛の側からいえば、そんな党はこわしてしまえということになる。なぜなら劉のいうように、例え間違つていても、党中央の指令に従えというのであれば、それは奴隸主義に他ならない。党規約を守らないというが、「共産黨員の最高原則は革命である。」もしある党の幹部がその革命原則に違反したのなら、われわれは「組織なく、規律なく」彼に造反すべきである。(実際五・一六兵団はそういつていた。)

その結果、党中央委員の過半数が追放され、省・県、各種機関の党委員会はメタメタにつきあげられてしまったのである。

しかもそれは一九六六年五月の紅衛兵の出現において、初めて可能であつた。文革を始めて五カ月もたつて、ほとんどめだつた反応もなかったものが、突如として北京清華大学付属中学に四十人の紅衛兵が現われるにおよんで、たちまち全国に波及していった。そのすさまじさは当の文革を呼びかけた毛さえ予測もつかなかったもので、毛は中央工作会議の席上、「極めて

短期的にすさまじい勢いで盛りあがった。北京大学の大字報がひとたびラジオで放送されるとあのように、全国がわきあがるとは私も予想しなかった」(一九六六・一〇・二五)といっている。中国伝統社会の一揆の性格は、ここでも再現しているのである。

紅衛兵運動の最高潮は、そのもう少し後で、毛は同年八月から八回にわたって千三百万人の紅衛兵と接見した。当時北京の町には、常時百万人の紅衛兵が溢れていた。北京の人口は六百万人だから、人口六人に一人の割合で紅衛兵だったことになる。しかも全国約一億に及ぶ小・中・大学生が大交流と称して、あの広い中国を歩き廻っていた。そうした爆発的エネルギーがあればこそ、大は教育制度から、小は美術のデザインに至るまでの数々の変革を一挙に成し遂げることができたのである。

しかもこのような文革を、毛は今後もやる必要がある。「一世紀の間に二、三度文化革命をやる」といっている。これはほぼ一世代について一回という意味あいであろうが、このような毛の発言の根は「連続革命論」から出てくるものである。この「連続革命論」であるが、ここにおいてもわれわれは、トロツキーというよりは、バクーニンの顔を垣間見ないわけにはゆかない。なぜならトロツキーの「永久革命論」は横の広がりを中心とした、多分に水平的な意味あいでの永久革命論であるが、バクーニンのそれは、それと反対に縦方向を軸とした、多分に垂直

的な意味あいでの総破壊であるから——。毛の連続革命は水平関係も含むが、より垂直関係の革命論である。平面的であるよりは時間的である。そういうところにも、両者の革命観の近似性をみつけることができると思われる。

だが、紅衛兵運動も(当初からそうであるが)、六七年に入ると「無秩序」の様相を帯びてきた。六七年二月には、「闘争の水準を引き上げねばならない。現在の水準はあまりにも低すぎる」(毛の言)ということになるのである。北京の町の到るところに、「犬の頭を叩きつぶせ」というスローガンが掲げられていた。反革命幹部は首に罪状を書いた札を下げさせられ、ジェット機のように両腕をねじまげられて、大通りを引き廻されていた。学校の黒い教師は学生にとらえられ、監禁労働させられ、屋上から飛び降りて自殺する教師もいた。解放軍の鉄砲弾薬を奪い、街頭で互いに撃ちあうという猛烈な内ゲバも現われてきたのである。まさに「でたらめ」の意の無政府的混乱が、全中国を覆っていたということになる。

しかももっと悪いことに、「ゆきすぎ」がさらに「ゆきすぎ」になったところで、文革を呼びかける当事者自体の否定の声があがってきた。連続革命は、連続革命を称える者自体の革命に向かつてきたのである。ここにおいて毛は「無政府主義」の名において、それらを断ぜざるを得なかった。因みに文革後半の新聞・雑誌をのぞいてみると、いくつも「無政府」を表題と

した、否定の論調をみつけることができるのである。曰く――

「無政府主義を打倒しよう」(一九六七・四・二六「人民日報」社説)

「無政府主義は反革命に通ずる政治的橋梁である」(一九六八・二・二五「人民日報」論文)

「無政府主義の思潮を労働者階級の内部から一掃しよう」(同・三・一「人民日報」紹介文)

「無政府主義は社会主義革命をひきつづき行なうこととての反動である」(一九六九・八・二九「紅旗」論文)等々。

毛自身も「アルバニア同志との談話」において、「今、一種の無政府主義思想が流行している。そのスローガン(注)は、へすべてを疑え、すべてを打倒せよだ。」と語っている。また別な場所では、「上海市人民委員会の機関は、周恩来首相に命令して、『長』と名のつく一切の指導部をやめるように要求した。これは極端な無政府主義であり、反動である」(張春橋・姚文元への指示)ともいつている。この「無政府主義」流行の中核部をなしたのが、今日、五・一六兵団として断罪されているのである。五・一六兵団と共に省無連(湖南省会無産階級革命派大連合委員会)の略称)も問題となっている。

しかし文章等によって知られる限りの両団体は、終局にはアナキズムとはいえず、どちらも毛沢東思想をかざしているのである。毛思想を延長すれば、ここまでくるのは当然という感じ

がある。しかも五・一六兵団は省無連と同義的に扱われるのであるが、みるところ必ずしもそうではない。五・一六兵団はより直接的に毛と関りあい、周恩来打倒を目指して、大きく問題とされているが、省無連の方はより間接的に毛と関りあい、中国自体の方向を考えたために、直ちに(三カ月後)弾圧解放の憂き目にあったのである。

省無連は公安、検察、法院を完全に腐敗しきっているとし、「現在の省革命委員会準備小組は、実際は旧政権のひきうつしである」(「われわれの綱領」として。中国の方向として、「中華人民公社」を提起し、官僚がなくなると生きてゆけるばかりか、ずっと発展できるといった。革命については陳独秀の「二段革命論」を反動的なものだともいつていた(「中国はどこへ行くか」)。ここにおいてわれわれは、省無連に毛思想の殻をかぶった如実なアナキズムの存在を認めざるを得ないのである。省無連が成立してあわてて飛んできた(一・二二)中央文革小組の康生は「あの理論は絶対に中学生が書いたものではない。背後に黒い手があるに違いない」といったが、多分実際にかつての彭湃の遺志を継ぐ数々の黒い分子がいて、指導権を握っていたに相違ないのである。

(注)文革中の無政府のスローガンには、この他次のようなものがあつた。

*われわれは如何なる権威も信じない。

- * 一切の規則、一切の束縛は粉碎されねばならない。
- * あらゆるものを否定し、あらゆるものを打倒せよ。
- * プロレタリア独裁は徹底的に改造されねばならない。
- * 各派は各派のために闘い、各人は各人のために闘うべきだ。
- * 混乱は一切を意味する
- * すみやかに無政府状態をつくりだせ、等々。

(中国科学院哲学社会科学学部革命造反团刊行新聞より)

(4) 中華人民公社

ところで中国はこれほどまでの混乱を引き起して、一体何をやろうとしていたのか、どこへ向かおうとしているのか？ プロ文革の名の下でも多くことが語られ、行なわれたので、どの部分をもつて代表的な成果としていいのやら判らぬ状況である。しかしそれを省無連に聞いてみると、ハッキリ「中華人民公社」(中華コミューン)の設立が目標であったというのである。『中国はどこへ行くか』によると、一九六七年六月一日、北京大学の「革命師生」

による壁新聞が現われるや、毛はすぐに、「二〇世紀六〇年代における北京人民公社の宣言である」といったという。つづいて「一月革命の中で、毛主席はまた『中華人民公社』の名称を提起した。これが第一次文化大革命の最終的結果であり、中国は『中華人民公社』の方向に向かつていこうとするのである！」と述べている。

「一月革命」とは、全国的に奪権闘争が烈しく行なわれたことをいう。「中央についてみると、財政部、放送局などの部門では次々に奪権が行なわれ、李先念、陳毅、譚震林といった連中、および彼らを代表する周恩来の権力も大々的に下降した」(同前)この短い期間内に実際上一部の地区では、パリ・コミューンに似た「大衆独裁」(同前)状況が出現した。「上海人民公社」の成立がそれであり、そのアピールでは明瞭にコミューン型政府の指向をうたっていた。首都北京でも紅衛兵の大連合による代表大会が北京コミューンを呼びかけ、五十八団体が連合して「北京人民公社準備委員会」が結成された。その結果、労働者階級の生産の熱情と主体は大々的に解放され、労働者たちは初めて、「国家がおれたちを管理するのではなく、おれたちが国家を管理するのだ」(同前)と感じていたのである。

ところがその「都市人民公社」の創立を構想し(王力のことば)、上海の「一月革命」を指導したといわれる毛その人によって、反対の憂き目にあったのである。このことについて省無連

は「なぜ、ヘコミューン」を極力主張しながら、毛沢東同志は、一月に突然『上海人民公社』の樹立に反対したのだろうか。これは革命人民に理解できないことである。」（同前）と歯ぎしりせんばかりに疑念を述べている。これに対し、毛は次のように答えている。「もしも全国到るところに人民公社ができたなら、中華人民共和国は『中華人民公社』と改名しなければならなくなりやせぬかということだ。現在多くの地方から人民公社の成立を申請してきているが、党中央は『上海人民公社』以外には認めぬ方針を伝えている。」（一九六七・二・一二―一八「張春橋・姚文元への指示」）その唯一の上海も、「名前を『革命委員会』または『人民委員会』と変えたらどうか」とも提案している。

これでは毛自身が呼びかけたとされているものとまるで話が違うことになるが、毛は「一月革命」につづく、周恩来らの捲き返し運動「二月逆流」の中で、考えを変更せねばならぬ場面があったのだらうと想像される。当の周恩来は「帝國主義の侵略を目前にして、強力な統一政府がなければ、中国は亡びてしまう」といういい方をして理由とした。実際、「中華人民公社」にはその危険性がないわけではなかった。なぜならそもそも人民公社とは、農村人民公社が典型であって、自給自足体制を意味する。そこには軍事あり、学校あり、医療施設あり、権力と生産（「政・社会」）とが結合していて、一人民公社が即ち一国家をなしている具合なのであ

る。それがさらに都市部まで拡がるとなると、中国全体が人民公社となり、中央政府は不必要なものとなる。とすると、強大な統一軍事力も不必要なものとなる。それでは敵の組織的な正規軍の侵略を打ち破ることができないことになる。

かくして都市人民公社の発想は潰えて、三結合による革命委員会止まりとなったのである。

一方農村部における人民公社は、それまでに比していつそう強化されることになった。文革とは即ち教育の機会であり、農村人民公社の重要意義が説かれることで、とうとうと（一千万人ともいわれている）都市部住民の「上山下郷」（山へ登り野に下る）が行なわれたのである。むしろ政府機構そのものの簡略化（「精兵簡政」）も実施されて、周總理がスノーに語ったところによると、國務院の下部機構である各種委員会、各種弁公室（各省と同格のもの）などは、前憲法時代に九十余あったものが、二十六にまで減るといふ。また首都北京の官庁の職員はこれまで約六万人いたものが、現在すでに一万人にまで減ったといっている。後の五万人は農村部へ下^{シャアツン}放されたわけである。

それではなぜそれほどまでに、農村人民公社（現在実質的には、人民公社は農村にしかない）を重視する必要があるのだろうか。それは一つには軍事的意味あいであり、一つには生産の意味あいにおいてである。軍事的意味あいとは、仮に核戦争を想定した場合、中国のような広大

な国では人民公社の数(約八万)ほど核爆弾を落さねばならぬことになる。自給自足的(根拠地)であるところから、都市部の重産業が破壊されても、戦闘継続は可能である。上陸作戦においても、都市部を占領されても困らず、敵が内陸部へ入れば入るほど補給線が長くなり、やがて自壊する運命となる。生産的意味あいでは、何といっても公社のような大規模合理的組織においては、労働力の節約と集中において、有利には違いないのである。

だがその根本的意味あいにおいて、「三大格差」の解消が狙いであることは明らかである。毛自身も、『張春橋への指示』(一九六七・九)で、次のようにいっている。「現在のこの文化大革命は驚天動地のことがらであり、社会主義の関門を越せるか越せないか、敢然と越すか越さないかがかけられている。この関門とは、最終的に階級を消滅し、三大差別をなくすことである。」それを大衆を信じてやれという。つまり文革とは三大差別の基本としての、「都市と農村の差別」をなくすこと(平均化すること)であり、もともと都市部の大量の人員を農村へ送り込むことが狙いだったともいえる。ことに辺境の新都市建設には人間が必要だった。

これを農村の側からいうと、農村の都市化ということになる。中国はもはや資本主義国のような機能集成的な巨大都市をつくる気はない。逆に農村自体の中に都市機能としての、工業その他を産みだそうとしている。産業においては少数の重工業は重視するが、それは多数の軽工

業を土台とする。重産業といえども、自らが喰べてゆけるだけの食糧は確保するようにする。われわれが訪ねた北京近郊の大車輛工場においても、食堂でみんなが喰べている穀物・野菜は自分たちでつくったものだといっていた。中国はそうように、都市と農村の結合を着々と行ないつつあるのである。

その典型例が東北に存在するといわれる、大慶油田である。中国には未だ発達した都市農村といわれるものは現われていないが、農を従とした新型都市としての農村都市はある。恐らくは西部辺境地域にその大規模なものが実現しつつあるのであろうが、人口に膾炙しているものではこの大慶油田がある。大慶油田はソ連の給油停止から、急遽、新油田として開発されたものであるが、この三十万人を擁する大慶地区に二万六千余ヘクタールの農地がある。大都市の代りに三つの町と四十一の中心村があり、商店や病院、学校が配置されている。その囲りに百七の「居民点」と呼ばれる住宅地区があり、世界の他の油田のように職場と住居とが切り離されていないのである。

何事も総合的観点が貫かれている。五・七幹部学校といわれるものも、終局的には同じ趣旨によるものである。ここでは都市の幹部が元通りの給与を受けつつ、半労半学の教育を受けている。期間は普通一年間、その間に徹底的に、「頭脳労働と筋肉労働」の一体的人間をつくり

あげようとしている。社会的にも、人間的にも、三大差別の消滅を目指して頑張っているのが今の中国である。

(5) アナルコ・ボルシェヴィズム

このように中国においては、戦前戦後において甚だしく、アナキズムの様相をとる。例えば下放ということば一つとってみても、それは人間自身の「上山下郷」を意味するのではなく、権限の下放をも意味する。中央の管理権の下部への移譲である。このことはいわゆる共産主義は中央集権のイメージと反するようにみえるが、実際人民公社設立と同時に、それまでの政府管理の大方の部分が公社管理として移されたのである。そのことによって大衆の創意と自力更生に期待している。大衆の自力を重んじているのである。「人民公社の幾つかの問題の決議」では、公社の進むべき五つの道として、(1)工業化 (2)全人民所有 (3)必要に応じた配分 (4)三大差異の解消を挙げ、最後に(5)国家の対内的機能を次第に縮小し消滅させる道、終局には「無政府」への道をハッキリと掲げているのである。中ソ論争にしても、あれほど毛がソ連に噛みついて背景には、アナキズムがあるとみられる。ソ連党官僚による中央権力の固定化は、

毛にとってどうにもガマンならないものであろう。

だが中国におけるこのような無政府への志向は、アナキストのいうようなやり方で行なわれているわけではない。その点ではまさにマルクス主義的に行なわれているのである。この国ではアナキズムの象徴言語としての、無政府、反抗、直接性、教育、扶助、民兵、連合、コミューン等のあらゆる言語が存在すると同時に、マルクス主義における象徴言語としての、権力、組織、計画、媒介性、団結、階級性等の言語もまた確実に存在する。確実に存在するというより、アナキズムは本来不可視的であり、マルクス主義は可視的であるところから、表側にみえるところはマルクス主義のみとなるのである。しかもそのマルクス主義はレーニン流ボルシェヴィズムをさらに徹底させたところがあり、強大な軍事力を背景とする。彼らの言によれば「革命の根本問題は権力の問題である。権力があればすべてがあり、権力がなければすべてを失う」(「人民日報」)徹底した強権主義である。

中国の都市を訪れて驚かされることは、革命委員の数の多さである。街中の職場といわず横町といわずあらゆる所に、白地に赤文字の「××革命委員会」の札が下がっている。確か五人ぐらいしかないといっていた湖南の劇場にも、ちゃんと革命委員の札が下がっていた。この三結合による革命委員会の一本の柱が軍である。中国都市のほとんど無数といってもよい革命

委員会は、全国家予算の四分の一（以前は三分の一）も使う強大な軍事力によって保証されているのである。一口に「精兵簡政」（軍隊の精鋭化・行政の簡素化）というが、「簡政」に「精兵」が加わることに、中国らしい特徴がある。「簡政」の最も極端なものは「無政」であるが、これは「精兵」によって完遂される。「精兵」なければ「簡政」もなしである。

これをいけると目的はアナキズム、方法はボルシェヴィズムということになるのか。中国はすべてをなすことができる権力において、アナキズムを実現しようとしているのである。アナキズムは「自然」、マルクス主義は「人為」をもって立つとすれば、あらゆる自然が人為的になされる。無権力のアナキズムと権力のマルクス主義をくつつけるのは、丸い三角というようなものであるが、ここではそれが現実においてある。それ故に毛沢東中国共産主義の内容は、〈強権アナキズム〉あるいは〈アナールコ・ボルシェヴィズム〉と呼ばれていいのである。毛の基本的な考え方は「あれかこれか」ではなく（絶えず重点主義的ではあるが——）、「あれもこれも」である。思想においても実質的に、毛はアナキズムとマルクス主義の二本足で歩いているのである。

アナキズムとマルクス主義の二本足というより、もともとアナキズムとマルクス主義とでは究極目標にそれほど差異があるわけではないともいえる。『国家と革命』におけるレーニンが

それで、彼はここでマルクス・エンゲルスを引いて、国家の死滅について熱情的に語っている。「マルクスは無政府主義に対する彼の闘争の真の意味が歪曲されないために——プロレタリアートにとって必要な国家の〈革命的な過渡的な形態〉をわざわざ強調している。プロレタリアートにとって国家が必要なのは、ただ一時的にすぎない。われわれは、目標としての国家廃止の問題については、決して無政府主義者としてくいい違っているのではない」（『無政府主義者との論争』）。

しかし現実的には一時的権力機構は権力自体の志向性から、永久権力化し、やはりアナキズムは創造的な思想として自立してしまふ。達成された社会主義社会としてのソ連が、その典型例であるように、国家強化の方向はみえてもいつか死滅の方向はみあたらない。そのマルクス主義における最も弱い部分を、毛はぶち破ろうとしている。だがその実現において再び、より強大な権力を必要とすることになるのである。

思えばプロ文革といえども、その内的必然性はあったにしろ、やはり強権的な指導力に依るものであった。それは例えば「プロ文革は毛主席自らが発動し指導された運動である」といういい方の中に現われている。実際に、毛は談話の中でそのような言い方で肯定しているのだから。先に挙げた「党中央工作会议」の発言の中で、「私個人がこんな騒ぎを引き起したのだか

ら、諸君に恨みごとをいわれるのも無理はない。前回の会議で私にも自信がなく、やるかやらないか決めていないといった。「やるかやらないか」といつているところに、われわれにこの革命の性格を充分窺わせるものがある。もし「やらない」と決めていたならば、この革命もまたなかったのである。民衆が散々アナーキーに暴れている積りでも、それは「混乱するならばしばらく混乱させよ」（杭州中央会議での指示）という、毛の保証のことがばあつてのことであつた。「中華人民公社」については先にみた通りであるし、「権力奪取後は、国務院に報告して同意を得なければならぬ」と、すべてが「人為」（計画）づくめである。その意味ではプロ文革は、仏様の掌中を飛びかう悟空のごとき存在であつた。

人民公社においてもほぼ同じことがいえる。確かに人民公社成立と同時に、国营企業その他の権限は公社の側に移された。自給自足が建前であり、苦しくとも国家に頼らないことをもつて原則とする。（有名な大衆はそのことで評価されている。）こうした組織にあつては、絶えず遠心性が働き、一部の研究者によつて、本来計画経済をもつて立つ社会主義実現の困難をいわれたりするのである。しかしこれは思い違いも甚だしいので、人民公社は一面では人民の自治共同体であると同時に、他面では国家権力の末端機関であることを思わねばならない。人民公社の成立によつて、それまでの郷政府は廃止となり、中央政府はより統一支配が可能となつて

いるのである。

協同組合時代の郷政府は行政面だけしか指導できなかったが、現存の公社管理委員会は農村経済全般にわたつてまで指導できる。その意味では「政・社合一」は一面では確かに国家の内部に対する独裁機能を縮小させたが、他面では経済活動にまで及ぶ、より強大な独裁を可能とした。これは国家最底辺からのプロ独裁の強化の現われ、とむしろかれらは誇つてもいのである。人民公社幹部は集団経済の組織であると同時に、国家の幹部でもある、とことごとく説かれるのも同じ理由による。人民公社は決して遠心的にのみ働いてゐるのではない。むしろ中央権力への反対に求心志向の方が強いのである。

このようにみると、われわれはやはりこの国のアナキズムへの傾斜よりは、他の社会主義同様の、いや、それはより理想主義的であるが故に、より純粹なマルクス主義的方向を認めざるを得ないのである。しかも思想が純粹であるが故に、マルクス主義の欠陥とされている面もまた、より純粹に（濃度を増して）社会現象として現われざるを得ない。中国共産主義の抱えている矛盾は大いに深いのである。